



# 学校だより

～ ひびきあう心 かがやく笑顔 ふれあいの丘 斎藤分 ～

令和3年 5月 31日 6月号

横浜市立斎藤分小学校 校長 黒木 健

## ～ 続けることから見えてきたもの ～

校長 黒木 健

日を追うごとに、初夏の風を感じるようになってまいりました。本校保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。さて今月の学校だよりは、私が中高生時代に繰り返し行っていたことからの話です。

私が中高生であった頃の6年間、悪天候の日を除いて、ほぼ毎晩やり続けたことが一つだけあります。それは、“走ること”です。走るコースは3キロ程から8キロ程までと、自分の頭の中にくつつかのコース設定があって、その時の体調や気分によって、その日はどのコースにするのかを走り出す瞬間に決め、自宅をスタートするというのが一つのパターンでした。中高生時代に不登校状態からなかなか脱却できず、部活動にも所属せず、また親友と呼べるようなこれといった同級生もなく、6年間“帰宅部”であり続けたような自分が、どうして毎晩走ることになったのか、そこには、学校に上手く馴染めなかったことに対する焦りや、勉強にもなかなか集中することができなかった自分へのやるせなさ等、今考えると様々な要因が交錯していたのだと思います。

そして意外にも走ることを通じて得たものは、持久力というよりも、“自分自身を振り返る機会”でした。今でこそ学校や大規模なマンションが建ち並ぶ地域も、当時は雑木林や農地で夜になれば人通りも少なく、恐怖心に苛まれながらも、日々そこを駆け抜けて行きました。そうした漆黒の闇の中を疾走しながら、頭の中に様々な思いが浮かんでは消えていきました。それは、明日学校に行こうかそれとも休もうかといった目先のことから、これから先の人生をどう立て直していけばいいのか、高校・大学受験のための勉強はどう進めていくべきか、また当時、重い心臓病を患っていた祖父のこと等、頭の中に思い浮かぶことは多岐に渡っていました。高校卒業後、予備校での浪人生活を経て何とか大学生になれた頃になってやっと、毎晩のように走り続けていたことの意味や価値を冷静に振り返ることができるようになりました。あの頃、もし自分の殻に閉じこもってばかりいて、毎晩同じようなことを考え続けていたとしたら、確実に気持ちは病んでいただろうということや、電車やバスの車窓に次々に現われては消えていくような何気ない風景を、走ることを通じて見ることができたこと、また暗闇の中を走っている時だけ、いささかの現実逃避ができたこと等です。

先日、実家を訪れた際、急に思い立って当時走っていたエリアを散歩してみることにしました。実家から程近い場所にありながら、一体ここに何年間、足を運んでいなかったのだろうと懐かしみながらも、その当時には、まだなかった道路や新たに開発された住宅地などに目をやりつつ、その一方で、やはり当時のことを思い出さずにはられませんでした。あれから30数年の年月が流れ、また、その後の人生の軌跡で何度も記憶が上書きされ続けたことによって、今ではその時の思いも徐々に薄れかけつつあります。強い信念のもとに始めたことではありませんでしたが、それでも6年間走り続けたことが、その後の自分の力にもつながっていったに違いないと、散歩をしながら再確認できたような気にもなりました。何かに取り組んでみることは、今直ぐにではなくとも、いつの日かそのことの意味や価値に気が付ける時が来るはずです。そうしたことから、勉強に限らず家の手伝いやちょっとした運動など、まずは身近なことから、もしお子様が「これなら続けられそうだ。」というものがありましたら、ご家庭でもご支援をいただきながら、それを続けていただければと思う次第です。